

情報共有

(9枚)

※ NISA分室 あり渡し済み
プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時: 平成 23 年 6 月 18 日 (土) 11:00~12:00
場所: 東京電力本館 3 階 大会議室
先方: 記者約 35 名 (カメラ 3 台)
当方: 原子力・立地本部 [REDACTED]
原子力設備管理部 [REDACTED]
広報部 [REDACTED]

- 配布資料:
- 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (6月18日 7:00 現在)
 - 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果 (6月18日)
 - 福島第一原子力発電所 2号機 原子炉建屋内空气中放射性物質濃度推移

[REDACTED] よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑:

Q. 今回のシステムの停止は、セシウム吸着装置のスキッド付近の配管の影響とのことだが、上流の方で高濃度汚染水のスラッジを吸着したためと考えて良いか。

A. 今回、油分・テクネチウムを除去する吸着塔で線量が高くなったため、要因としては、その付近の高濃度汚染水が通っている配管の線量の影響を受けたためか、もう1つは、流れてきたスラッジが最初のスキッドで吸着したためと思われる。

Q. 油分・テクネチウム除去用の吸着塔、セシウム除去用の吸着塔の交換頻度・コストの想定はどれくらいだったのか。また交換はどのように行っていくのか。

A. 油分・テクネチウム除去用の吸着塔は1ヶ月に1回の交換と考えていた。セシウム吸着塔では主にセシウムを吸着させることを考えており、頻度としては、最大で1日に2~4塔の交換を考えている。いずれの吸着塔も下部のロックを外して、クレーンでつり下げて交換していき、数時間で交換可能である。交換後はトレーラーで、仮置き場へ持って行く。また、交換のコストは、当初のランニングコストとして見積もっている。

Q. アレバ社の除染装置に問題はないのか。

A. 問題はない。

Q. 今回の停止によって、6月18日に予定している循環冷却運転の工程に影響はないのか。また工程表の全体の進捗に影響はないのか。

A. まだ高線量となった原因が分かっていないので未定。工程表でステップ1完了の目安は7月中旬と考えているので、今のところはステップ1への影響はないと思う。

Q. スキッドの表面線量ということだが、スキッドごとに測定しているのか、吸着塔ごとに測定しているのか。

A. スキッドに4つの吸着塔があり、それぞれ1つずつ線量計がついている。

Q. 吸着塔で線量が4 mSv/hを超えると交換するとの話だったが、スキッドの表面線量が4 mSv/hを超えた場合はどのように対応するのか。

A. 確認させていただく。

Q. 線量はどのように把握しているのか。

A. 線量計の指示値をコントロールルームで確認することができる。

Q. 油分・テクネチウム除去用の吸着塔とヨウ素除去用の吸着塔にそれぞれ違いはあるのか。

A. 主成分はゼオライトであるが、油分・テクネチウム除去用の吸着塔は特殊な表面の加工をしており、ヨウ素除去用の吸着塔は銀を塗布している。

Q. 油分・テクネチウム除去用の吸着塔とセシウム除去用の吸着塔のスキッドの交換方法に違いはあるのか。

A. 交換の方法は同じである。

Q. 2号機原子炉建屋に建屋カバーは予定していないのか。

A. 2号機原子炉建屋は健全だと考えているので、今のところ予定はない。

Q. 2号機使用済燃料プールの燃料棒取り出しは中期的か長期的なのか。また燃料棒の取り出し後の処理はどのように考えているか。

A. 現段階では、中期的な課題であり、具体的な時期はまだ明示できていない。取り出し後の具体的な計画はまだない。

Q. 油分・テクネチウム除去用の吸着塔の交換頻度が1ヶ月ということは、テクネチウムの量が少ないからという理解でよいか。

A. テクネチウムだけでなく、その他の放射性物質を含めて交換頻度は1ヶ月と見ている。

Q. 高線量のスラッジとは具体的にどのようなものか。

A. 形状は不明だが、タービン建屋の溜まり水を移送してきているので、津波と一緒に流れてきた泥や埃などに放射性物質が付着して混じっていたのではないかと思う。

Q. セシウム吸着装置でヨウ素を除去する吸着塔はどれくらいで4 mSv/hに達すると考えているのか。

A. 確認させていただく。

Q. 現在行っている低レベルのサプレッションプールサージタンクの水の循環運転の目的とは何か。

A. システムを止めないという目的と、サプレッションプールサージタンクの水も 10^3 レベルの汚染水であり、溜まり水のままにすることも出来ないの、出来るだけ低減していくという目的がある。

Q. 現在、高濃度汚染水の除染は止めているという理解でよいか

A. 高濃度汚染水のプロセス主建屋から水処理システムへの移送は止めている。

Q. 2号機原子炉建屋の二重扉の開放はいつになるか。

A. 具体的な日程までは決まっていない。自治体の方への説明が終わり次第、日時を決めていきたい。

Q. スラッジが泥や埃のようなものであれば、油分・テクネチウム除去吸着塔の前段階で何かフィルターなどを設置しないのか。また、検討はしていないのか。

A. 油分・テクネチウム除去吸着塔の前段階として、油分離装置がついているが、さらに細かいものをとるような装置はついていない。原因をしっかりと究明した上で、対策、検討を行っていきたい。

Q. スラッジではなく、配管の線量が原因とすればどのように対策していくのか。

A. 配管に鉛毛マットなどを巻き付けて遮へいしていく。そうすれば、スキッドの正確な線量が測定出来ると思う。

Q. 線量計の指示値が4 mSv/hを超えると、システムは自動停止するのか。

A. 手動停止である。コントロールルームで運転員が監視しており、指示値が4 mSv/hを超えたことを確認したため、手動で止めた。自動停止するわけではない。

Q. 4つのベッセルの中でどのベッセルが4 mSv/hを超えたのか。表面線量が上昇した時の各ベッセルの表面線量はどれくらいだったのか。

A. 確認させていただく。

Q. 交換の基準である4 mSv/hで停止するという運用を見直すのか。

A. 制限を見直すのか、頻度を変えるのかなど、運用方法をどう変えるかは、原因を究明した上で検討していく。

Q. ヨウ素除去用の吸着塔に異常はないのか。

A. 特に異常はない。

Q. 今後の運用の検討に、高濃度の汚染水を薄めて水処理システムに移送していくという事は検討しているか。

A. 原因がスラッジであれば、そういったものが溜まりにくくすることは検討しなければならぬと思う。

Q. ゴミをとるためのフィルターは設置されているのか。

A. 設置していない。

Q. 処理水に含まれるゴミはどのように吸着させるのか。

A. システムの前段に設置されている油分離装置および油・テクネチウム除去用吸着塔内のゼオライトに吸着させる。

Q. 水処理システムの稼働に関する時系列は。

A. 昨日 20 時より 2 系列で運転したところ、途中、油・テクネチウム除去用の吸着塔で高線量を確認し、本日 0 時 54 分頃にシステムを停止した。その後本日 3 時 17 分から 2 系列での運転を再開している。現在はサプレッションプールサージタンクの水でフラッシングを実施している状況。

Q. 海江田経済産業大臣が臨時の会見を開き、本日地元の自治体に原発再稼働をお願いしたとのことだが、これに関する東電としての見解は。

A. 柏崎刈羽原子力発電所については原子力安全・保安院より指示を受けております緊急安全対策およびシビアアクシデント対策の実施、7 月中旬までに対応していく予定であり、点検後の再稼働については、原子力安全・保安院の確認および地元の自治体の了解を受けた上で実施したいと考えている。

Q. 水処理システムの本格稼働の見通しがたっていない中、汚染水の移送先であるタービン建屋は残り 1 週間程度で満水になると思うが、今後 1 週間以内に本格稼働できるのか。

A. 明日より移送開始予定である 1 号機復水器、集中廃棄物処理施設、タービン建屋に 1 週間程度溜められると想定しており、今後 1 週間以内には水処理システムの再稼働を実施する必要があると考えている。現在想定している原因であれば 1 週間以内に稼働できると考えている。

Q. セシウム吸着塔において高線量を確認したのはどの部分か。

A. 確認させていただく。

Q. 水処理システムの途中の配管については、線量測定を実施しているのか。

A. 確認させていただく。

Q. 装置全体として高線量なのか、それとも局所的に線量が高いのか。

A. 24 のベッセルのデータがあるので確認させていただく。

Q. スキッド付近の配管については既に遮へい対策を実施しているのか。

A. 確認させていただく。通常は無人運転であり、作業員が近づく時にのみ対策が必要と判断していた。

Q. 水処理システムを再度本格稼働させるための条件は。

A. 今回の不具合の原因が配管の線量であれば、配管に必要な遮へいを行うことで稼働できるが、吸着塔内にスラッジが溜まっている場合については、交換周期や流量調整などによりスラッジを巻き込まない方法を検討する必要がある。

Q. 本日中の水処理システムの稼働は難しいのか。

A. 循環注水冷却の実施の際には改めてリークチェックが必要であるが、これは日中に実施するため、今回の原因究明が夜にずれ込めば本日中の稼働はない。

Q. 0 時 54 分にシステムを停止しているとのことだが、実際に作業員が 4.69mSv/h に到達したことを確認したのはいつか。

A. 確認させていただく。

Q. 油分離装置における油分の除去方法は、

A. 水に浮いた上澄み部分を除去し、沈んだ水を次の工程に移す。

Q. 油分離装置で取りきれない油分の処理方法は、

A. セシウム吸着塔の前段に本装置を設置し、取りきれない油分はセシウム吸着塔の中で吸着させる。

Q. 水処理システムから濾過タンクおよび濾過タンクから原子炉建屋への配管敷設はいつ完了したのか。

A. 濾過水から注水するポンプは津波対策で高台に移設しているが、以前から使用していたものを使用している。仮設タンク設置に併せて配管敷設作業を実施した。

Q. 高濃度滞留水の処理後の受け入れ用のタンクに水が溜まっていないと、システムは稼働しないのか。

A. 受け入れ用のタンク内に水が無くなることを防ぐため、ある程度水を溜めてから稼働することになる。

Q. 全体システムの稼働を確認することで原子炉に注水できるのか。

A. 処理水のリークチェックが完了すれば稼働できると考えている。

Q. 処理水に含まれるゴミはセシウム吸着塔内ではどのように処理するのか。

A. 吸着塔内に充填しているゼオライト表面に吸着させる。

Q. セシウム吸着塔の前段に新たに油分やゴミを吸着させる装置を設置するのか。

A. まずは原因を究明し、運用方法等を見直すことも検討している。

Q. 2号機の空気中放射性物質の濃度が一旦下がって再度上昇した理由は、

A. 6月16日に値が極端に低下しているが、前段の作業として排気ダクトに溜まっている水を抜いている。吸気した空気はヒータ加熱し換気ファンにて建屋に戻しているがその際に温度が下がり凝縮しダクト内に水が溜まったと想定している。その水を抜いた関係で流量が出るようになり循環効果が上がった可能性がある。よって今回値が低かった理由としては、たまたま薄いところを吸い込んだものと考えている。現状の濃度としては 10^{-2} オーダー程度と考えている。

Q. 濃度はあまり下がっていないという理解でよいか。

A. 排気作業前の測定結果は 10^{-1} のオーダーだったので、1桁程度の濃度低下はありと
考えている。

以上

7

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成23年6月18日(土) 18:00~21:00

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約35名(カメラ4台)

当方：原子力・立地本部

原子力運営管理部

原子力設備管理部

柏崎刈羽原子力発電所

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について(第八十五報)
- ・ 福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について(第八十七報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれる放射性物質の核種分析の結果について(6月17日採取分)
- ・ 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について
- ・ 当社福島第一原子力発電所における核種分析結果の嚴重注意に対する対応について
- ・ 東北地方太平洋沖地震発生当初の福島第一原子力発電所における対応状況について
- ・ 原子力発電所用語集
- ・ 福島第一原子力発電所1号炉の設備構成の概要・2~5号炉の設備構成の概要
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ(6月18日12:00現在)

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 油に溶解している放射性物質が予想以上に吸着されている可能性があるという話だが、具体的にどのようなものが吸着されていると想定しているのか。

A. 放射性物質の付着した汚泥などが吸着されていると想定している。

Q. セシウム吸着装置の不具合が配管による線量の影響だったとすれば、昨日20時に本格運転を開始した時点で分か不具合が確認されるのではないか。

A. そういった観点もあると思うが、現在調査を進めている段階。3つの吸着塔「空(水のみ)」、「シリカサンド」「従来のゼオライト」での検証作業が進めば、原因も判明すると思う。

Q. 油分・テクネチウム除去装置の検証作業では、3種類の吸着塔を同時に検証するの

8

か、もしくは1種類ずつ検証するのか。
A. 確認させていただく。

Q. 検証作業にかかる時間はどれくらいか。また交換作業にはどれくらいかかるのか。
A. 検証作業にどれくらいかかるのかは、まだ評価出来ていない。吸着塔の交換作業は通常の運転でも想定していたので、あまり時間はかからないと思うが、従来のゼオライト、シリカサンドの吸着塔を準備するには時間がかかると思う。

Q. 油分・テクネチウム除去用の吸着塔は既に取りはずしたのか。
A. 確認させていただく。

Q. 循環冷却運転の開始は、システムの原因を究明して、高濃度の汚染水の処理を始めてからという認識でよいか。
A. その認識である。

Q. 低レベル汚染水の循環運転では、ポンプの異常や漏えいは今のところないのか。
A. 特に不具合などは見つかっていない。

Q. 従来のゼオライト、シリカサンドの吸着塔はいつ頃用意できるのか。
A. 確認させていただく。

Q. 3つの吸着塔を用意する目的を詳しく教えていただきたい。

A. 用意する目的としては、油分・テクネチウム除去装置が、スラッジを予想以上に吸着するのではないかとして検証するものである。既に測定している表面加工したゼオライトの吸着結果と従来のゼオライトだけでどれくらい吸着するのかを比較して検証していく。またシリカサンドの吸着塔と従来のゼオライトの吸着塔を比較することで、ゼオライトとシリカサンドのどちらに多く吸着するのか検証する。それらの比較対象として、水のみ吸着塔を検証に使用する。

Q. 配管からの線量の影響というものを詳しく教えていただきたい。

A. 油分・テクネチウム除去装置の真下を高濃度の汚染水の配管が通過しているので、その影響を受けているのではないかと考えている。

Q. 水処理システムの本格運転稼働後、5時間あまりで不具合によって停止したことに関してどのような認識なのか。

A. タービン建屋の溜り水の水位が上がってきているので、一刻も早く水位を下げて、環境に影響がないようにすることが重要だと思う。今回の水処理システムは初めての試みなので、容易なものではないと考えている。今後、安定的に汚染水を処理するために、初期の不具合を一つ一つ潰していく。ある程度の不具合は覚悟しなければならないと思っている。

Q. 水処理システムの循環冷却運転まで1週間猶予があるという数字的な根拠を教えてください。

9

A. タービン建屋の溜まり水の移送先容量としては、1号機の復水器が1200m³、雑固体減容処理建屋として、1000m³ある。今の移送量からすると2日程度で移送容量に達する。その後、タービン建屋の水位がO.P.4000mmに達するまで数日かかるので、合計すると、1週間から10日程度である。

Q. 当初4.7mSv/hだった表面線量が低レベルの水を流したことで、約1.8mSv/hになったことについてどういう認識か。

A. 吸着塔の中にスラッジが付いたことが原因とすれば、サプレッションプールサージタンクの低レベルの水によるフラッシングで流れるようなものであったということが判明した。また、表面線量が下がったことで、今後この付近で作業する際の被ばくの低減となった。

Q. 5時間本格運転した結果、高濃度汚染水はどれくらい処理できたのか。

A. 約75m³を処理できたと考えている。

Q. 本格運転再開に向けてどういったステップで行っていくのか。また、工程表に影響はないのか。

A. 交換頻度を1ヶ月に1回と見積もっていたが、5時間で交換基準となった原因を究明する。その上で、今回の検証を通じて、どのような運用方法にするか見極める。その上で、運用方法・流量の調整方法が判明できれば、運転再開できると思う。また今回の運転の不具合が、工程表を見直しするほどの大きな事象ではないと思っている。

Q. 高線量の原因が汚泥だった場合の対処方法は。

A. 現状の吸着塔を使用して頻繁に交換する方法、表面加工したゼオライトの種類を変更して、上流であまり吸着させず、下流に分散させて吸着させていく方法など様々な方法を検討中である。

Q. 計画している汚染水の処理量の1200m³/日を変更するのか。

A. 流量を下げることも検討しなければならないだろうが、まだ原因を究明している段階であり、未定である。

Q. 海水循環浄化装置の運転による効果はどのような認識か。

A. まだ明確な効果は確認できていない。カーテンウォールの撤去作業において、船のスクリーンによる巻き上がりで、数値が上がってしまっている可能性がある。海水循環浄化装置は約100日運転することを予定しているので、もう少し時間をかけないと効果は分からない。

Q. 今後、海底土の濃度は、時間が経てば減っていくものではないという理解で良いか。

A. 海底土に放射性物質が沈着すると、拡散しないため、濃度が下がるのは半減期による影響になると思う。

Q. ゼオライトのなかにあるシリカサンドには、どのような効果があるのか。

A. ゼオライトそのものはアルミノケイ酸塩といい、シリカと酸素の結合体である。通

常は、シリカがアルミニウムと置き代わり、ナトリウムイオンと結合して中性になるのだが、今回はセシウムイオンを使って吸着させるという仕組みとなる。

Q. タービン建屋やトレンチの水位が O.P. 4000mm まで 1 週間という中で、今後原子炉への注水量の変更なども検討しているのか。

A. 現在の注水量でも十分に温度は安定しているので、注水量の変更などは並行して検討しているものの、現段階で注水量を下げるという決定はしていない。

Q. 2号機の原子炉建屋の二重扉開放はいつになりそうか。

A. まだ決まっていない。周辺の自治体へ説明を行っている段階である。

Q. 福島第一原子力発電所に首相が来てから 53 分の間で、実際に話をした時間は。

A. 現時点では不明。

Q. 1号機ベント作業において、3月12日1時30分に国の了解を得てから同日8時03分に発電所長がベント操作の目標を9時とするよう指示しているが、その間実施していた作業は。なぜそこまで時間がかかったのか。

A. 場所の確認や昼間の操作手順の確認を実施しており、実際に作業をする上では原子炉建屋内に入ってからサーベイの実施、余震の影響により作業が中断する、等があったため思うように作業が進まなかったのが現状である。

Q. 3月12日6時50分に経済産業大臣からベントの実施命令があり、その後発電所長が9時を目処に操作すると発言しているが、約1時間の差があるがこの理由は。

A. 大熊町避難状況については同日8時27分に情報として入ってきた。避難完了後にベント操作をすることで考えていた。

Q. 9時を目処に操作するとしながらも8時03分に発電所長のベント指示が出ているが、その理由は。

A. 発電所長としては約1時間程度で実施できると考えていた。

Q. 8時03分に発電所長のベント指示が出た1分後に首相が現地を出発しているが、首相の発言がベント実施において影響があったのではないか。

A. 並行してベント作業の準備は進めており、偶然時間が重なったと考えている。

Q. 首相が福島第一原子力発電所に来ることが実際に現場に伝わったのはいつか。

A. 確認させていただく。

Q. 1号機ベント作業はいつから開始したのか。

A. 正確に判明しているのが3月11日17時12分よりアクシデントマネジメントとして原子炉代替注水および並行してベント作業の実施を行っていた。

Q. 3月11日17時12分という時間はベント実施を判断した時間か。それとも作業を開始した時間か。

A. 作業を開始した時間である。3月11日16時16分に、非常用炉心冷却系は使えないこと、同日15時37分に電源喪失していることから代替注水およびベントについてはその時点で意識していたと考えている。

Q. 各準備作業が全電源喪失から約1時間半経過しているが、これは対応が遅いのではないか。

A. 当時は中央制御室における運転監視操作と並行作業であった。実態として、暗闇の中でプラントパラメータの確認方法、機器の状況等の現状を確認していた。明らかに手順書に記録が残っていたのが約1時間半後であり、それまで何も実施していなかった訳ではない。

Q. 3月11日21時51分に1号機原子炉建屋の線量が上昇しているが、その際の値はいくつか。

A. 確認させていただく。

Q. 3月12日1時30分に総理大臣や経済産業大臣などからベント作業について了解をもらっているが、そのような手順を踏むことはアクシデントマネジメントの手順書には明記されているのか。

A. 緊急時対策本部の判断が必要ということについて記載がある。緊急対策本部は意図的に放射性物質を放出することになるため、政府の了解を得た上での実施が必要と判断した。

Q. 対策本部長は社長という理解でよいか。

A. その通り。

Q. S/Cベント弁(AO弁)小弁の遠隔開操作における、計装用圧縮空気系の残圧に期待するという意味は。

A. 大弁、小弁共通で空気を送るポンペの残圧に期待して弁を開けることを検討した。ポンペの詳細位置については確認させていただく。

Q. 3月12日1時30分に総理大臣や経済産業大臣などからベント作業について了解をもらってからベント実施の発表まで約1時間半あるが、そもそもプレス発表しないとベント作業を実施することはできないのか。また誰の指示なのか。

A. 放射性物質を意図的に放出することになるため、ベント作業にあたってはプレス発表してからと考えていた。現場では並行して手順書の確認、現場の状況確認、どのくらいで実施できるのか検討を進めていた。約1時間前後でベントできると判断していた。

Q. 約1時間半という時間は長い印象があるがかなりすぎではないのか。

A. その間にベントするかどうかを検討していた。また並行して現場の状況把握などの準備を行う必要があった。

Q. 3月11日2時58分に津波警報が発生していることが運転日誌にあるはずだが、これを受けての対応は実施していないのか。

A. 今回の報告書では重要部のみ抜粋しており、全てを記載できていない。

Q. 1号機については3月12日15時36分に電源車による通水準備完了し、それとほぼ同時刻に水素爆発が発生しているが、東電としての見解は。

A. 別の事象であり偶然重なったものと考えている。

Q. 今回の報告書は今後検証に使用するのか。また内容については深掘りを行うのか。

A. これまでの調査結果を整理できたので公表するに至った。必要部分は引き続き聞き取り調査を進めていく予定。全ての現象に対して理由付けができるかは不明だが、事故調査委員会には今回の報告書を基に話をしていく。

Q. 福島第一原子力発電所の設備については、中越沖地震時の反省はどの程度活かされているのか。

A. 中越沖地震においては地盤沈下が発生し車両が道路を通行できない、あるいは地中化していた設備が損傷する等の事象が発生していたので、福島第一ではその対応策として地中配管は地上化を実施。道路についても今回の地震発生後、地盤沈下により車両が通行できないといった事象は発生していない。今回の地震については、大津波が発生したことが中越沖地震と異なっていた。

Q. 1号機消火栓から水漏れした事象があるが地上化したことが原因ではないのか。

A. その可能性は否定できないが、消火栓が使用できないことを想定し、防火水槽を用意していた。また消防車も3台配備していたことや、免震重要棟は自前の電源が利用できたことなどからも、中越沖地震の教訓が活かされていると考えている。

Q. 今回の報告書の中で下線部分や太字の文言の意味合いは。

A. 太字部分是对应の中でポイントとなる部分。下線部分は作業する上で困難であった理由を説明している。

Q. 1号機の原子炉水位が以前は有効燃料頂部から450mmと報告していたが、今回の報告では200mmとなっている。この違いは何か。

A. 200mmが正しい。

Q. 2号機のパワーセンターの電源が使用可能であることを確認した時刻の記載がないが具体的にいつか。

A. 17~22時の間であることは間違いないが、詳細時間は不明。

Q. 電源車を繋ぐことにより圧力容器の冷却が進むと考えていたのか。

A. ホウ酸水を注入することが可能と考えていた。

Q. 12日15時30頃まで代替注水の準備作業に時間かかっていると思うが東電としての見解は。

13

Q. 津波の影響により、構内の道路事情が悪化したこと、電源喪失により発電所フェンスの開閉ができなかったこと、瓦礫の影響、などにより時間がかかったものと判断している。

Q. 1号機と3号機の水素爆発が2号機の作業に影響しているのか。

A. その通り。放射線量が増えた影響が大きい。

Q. 圧力抑制室付近で異音発生後に作業員が避難しているが、これは放射性物質が放出されたことによるものか。

A. 格納容器に大きな損傷があり放射性物質が放出されるという危険性があったため、避難させた。

Q. 今回の時系列公表に3ヶ月かかった理由は。

A. 実際に操作を行った作業員は現在も復旧作業を行っているため、聞き取り調査に時間を要した。またプラントパラメータについては、中央制御室から現物をとり既に手元にあるプラントデータとの整合を確認する作業にも多くの時間を要した。

Q. 時間がかかるということは新鮮な情報でなくなると思うが、今回の報告書の内容で事故調査委員会に十分耐えうるのか。

A. 一部補完は必要ではあるが、ある程度の信頼性はあると考えている。

Q. これまでに喪失したデータはあるのか。

A. メモ類に関してはない。但し、ホワイトボードに記載した内容については残し損ねた物があるかもしれない。

Q. 今回の報告書について公表日が遅れた理由は。

A. 本報告書は検証委員会が審議している訳ではなく、また6月15日の検証委員会にかかった段階で公表すると、いう予定でもなかった。

Q. 2号機ベント作業時に、ドライウエルベント弁の開操作においては一瞬でもベントが行われたという理解でよいか。

A. ドライウエルの圧力が750kPaであり、短時間でもあけばラプチャーディスクは破損するはずであるが、実態は現場を見ないと判断できない。

Q. ベントを実施することで内部の燃料が沸騰していたとしても、格納容器の圧力は低下するのか。

A. 大気圧と同じレベルまで低下していく。

Q. 格納容器の圧力が低下していないということはベントはできていなかった、という理解でよいか。

A. その通り。

Q. 1号機注水準備は3月12日15時36分に完了し、その1分後に水素爆発が発生している。これは電気を使用したことが爆発に影響しているのか。

A. 2つの事象は全くの別物である。3月12日15時36分に注水準備完了しているが、この時刻はホウ酸水準備完了の時刻であり、まだ稼働はしていない。電源についてはタービン建屋のパワーセンターであるため、原子炉建屋と直接つながっていないこともその理由である。

Q. 1号機ベント作業は3月12日6時50分に経産大臣からベントの実施命令が出てその後8時03分に発電所長から指示がでているが、その際に具体的に実施したことはあるのか。

A. 記録がないため正確な情報は不明。ベント実施に向け、調査など準備を行っていた。併せて大熊町避難状況も確認していた。

Q. 中小企業に対する仮払い賠償金の支払い状況は。

A. 6月17日時点で支払件数は105社。支払い金額は約1億6,000万円。また農林2団体に約3億円、漁業2団体に約8億5千万支払っている。

Q. 個人に対する仮払い賠償金の支払い状況は。本格的な賠償はいつから実施するのか。

A. 申し込み件数約6万3,000件の内、約5万2,000件に支払い済。振込額は総計約490億円。なお、審査指針や賠償支援機構がかたまった後に本格実施となると考えている。

Q. 非常用復水器の配管隔離弁の閉操作を実施した理由は。

A. まだ不明。また是非については事故調査委員会の判断を仰ぎたい。

Q. 東電としてはどう考えているのか。

A. 非常用復水器は冷却することはできるが注水機能はないためこの措置だけでは原子炉は回復しない。閉操作を実施したことについては今後原因究明して判断したい。

Q. 非常用復水器のA系のみ使用した理由は。

A. 2系列稼働した際に十分に冷えていることを確認したため。実態としてはB系は操作できなかつた可能性が高いが詳細は不明。

Q. 圧力容器の圧力が均一でないとはどういう意味か。

A. 本来圧力容器は均一になるはずだが原因はまだ不明。また真空破壊弁が圧力を調整するが実態としてはその調整がうまくいっていない可能性がある。

Q. アクシデントマネジメントの手順書は今後公表する可能性はあるのか。

A. 社内文書であり公表予定はない。政府事故調査委員会で求めがあれば提示する予定。

Q. アクシデントマネジメントは時間がかかってばかりで機能していない印象だが、東電としての見解は。

A. 津波により電源喪失、除熱源喪失、ガレキの発生、など作業できない事象が数多く発生しており、今回の地震はこれまで準備していたものを遙かに超えた事象と考えて

15

いる。

Q. 1号機の代替注水とベント作業については、その後の作業はどちらが困難であったか。

A. ベント作業、注水作業ともに事故の対応において最優先すべき作業である。但し、津波によるガレキや、電源喪失による暗闇での作業、度重なる余震や津波警報による作業の中断、等がどちらの対応も困難であった。

Q. 大熊町の住民避難については、既に公表されている内容か。

A. 国会にて武藤より説明済。

以上